

【研究論文】近松門左衛門『曾根崎心中』論

—恋の手本をめぐって—

八上 祐子

日本大学大学院総合社会情報研究科前期課程修了

Chikamatsu Monzaemon's "The Love Suicides at Sonezaki"

—Concerning the 'Model of Love'—

YAGAMI Yuko

M. A., Graduate School of Social and Cultural Studies, Nihon University

This analysis focuses on the history of Sugawara no Michizane, a man who famously underwent hardships after false accusations and who is enshrined in the woods of the Tenjin Shrine (Tenjin no Mori) within the precincts of the Sonezaki shrine, where the double suicide incident actually occurred and was later dramatized as a jōruri play. It explores how Tokubei's circumstances are projected onto the sorrow of Sugawara no Michizane and his choice to commit double suicide due to his pride and love for Ohatsu. Although Sugawara no Michizane is revered as the god of scholarship and a model for humanity, by focusing on this history, this study concludes that he became a "model of love," achieving a peaceful afterlife, in harmony with the final line of this work.

1. はじめに

江戸時代前～中期にかけ、京都・大坂において「作者の氏神」¹と称され活躍した近松門左衛門（以下近松）。その代表作である『曾根崎心中』は、一七〇三（元禄十六）年大坂道頓堀竹本座において発表された世話物（人形浄瑠璃）作品である。歴史上の人物が主題となる時代物とは異なり、世話物とは当時の社会状況、すなわち世事をその舞台設定に取り上げるものであった。社会情勢を反映し、その課題を取り上げた世話物浄瑠璃は、人々の実態や実感に即応するものであり、『曾根崎心中』はその嚆矢となった。

さらに本作品は実際に発生した心中事件がモデルとなっている。同年四月七日に大坂・曾根崎天神の森において発生した、大坂内本町の醤油屋・平野屋手代の徳兵衛と、堂島新地天満屋の遊女おはつの心中死事件がそれである。人形浄瑠璃の歴史書、西沢一風著『今昔操年代記』には、本作品が大評判となり「町中よろこび（中略）少しの間に余程の金を儲け」²と大当たりをとった記録が残されている。

あらすじは以下の通りである。徳兵衛はおはつとは恋仲である。徳兵衛の気づかぬ間に、その継母と平野屋の主人が進めていた、主人の姪との縁談には結納金がすでに支払われ、それは継母の手に渡っていた。徳兵衛が必死にこれを回収してきたところであつたが、さらにその金は友と信じた油屋九平次に、巧みな冤罪を仕掛けられた上に、騙し取られていた事実が判明する。縁談を破談にするために最低限必要であつた金を失った上に、いわれのない罪を被り進退窮まった徳兵衛は、事情を知ったおはつが着衣している打掛の中に匿われながら天満屋の床下に潜む。満座の中でおはつは足元に隠れる恋人に、死ぬ覚悟を問う。徳兵衛はおはつの足をその胸に抱き、さらに自分の首に当てる動作で、密かにしかし明確に、死への覚悟と心中の意志を伝えるのであつた。その晩二人は廓を抜け出し、辿り着いた先は曾根崎天神の森。そこを死に場所と定め、二人は心中を遂げるのであつた。

先行研究としては明治以降、多岐に亘る研究が行

われてきている。主に二〇〇〇年代以降の研究成果を紹介する。近世文学研究者の早川久美子氏は敵役九平次に注目し、「お初を徳兵衛に結び付ける役割を担って」と論じた³。東アジアの古典文学が専門の染谷智幸氏は本作品当時の情勢を踏まえた経済社会における、九平次による公権力を駆使した情報操作に着目する分析を行っている⁴。国語学者である坂梨隆三氏は本作品の初版完本など版ごとの異同、印刷時の制約による表記の違いや、版によっての読み間違いの指摘などを行っている⁵。日本芸能史・文化史が専門の漆澤その子氏は『曾根崎心中』の江戸期の上演方法の変遷、江戸における上方文化の受容様態を検証し、改作が施されていく過程を分析した⁶。

発表から三百二十年以上経過している本作品であるが、現代に至ってもなお、このように近世文学や演劇の専門外も含まれる、各分野からの新しい研究成果が著されている。

本稿では徳兵衛とおはつの心中死の場所が「曾根崎の森」であったことに着目して論を起すこととする。二人が心中死を遂げる場である曾根崎の森は、正式名称・露天神社（つゆのてんじんしゃ）と言う古社を擁する神域である。天神社の祭神は菅原道真公（菅公）であり、天神とはすなわち菅公である。菅公は「学問の神様」として崇敬されており、各地に天満宮（天神社）が建立され、信仰は本作品発表当時において、既に広く普及しているものであった。

この天神所縁の地で壮絶な心中死を遂げた徳兵衛とおはつは、堅い絆で結ばれていると近松は提示している。それは最終章で「貴賤群集の回向の種。未来成仏疑ひなき、恋の手本となりけり。」⁷と人々の模範となった二人の恋であった、と詞章でも明確に示されることで理解できる。世話浄瑠璃世界の構築に際して近松に創作された徳兵衛とおはつの物語であるが、二人が心中死を遂げる曾根崎の森という場所が、本作品においてどのような意味を持つのかを分析する。

なお、テキストは鳥越文三・山根為雄ほか校注・訳『新編日本古典文学全集 75 近松門左衛門②』（小学館 1998 年 5 月）を使用する。大阪の表記は、近世における場合には大坂と表記する。おはつの名については、テキストに基づきかな表記とするが、参考

文献引用時などにおいては、それに従うため「お初」と表記する。また菅原道真公に関して以降は、信仰の対象としての尊称である菅公に例外を除き、統一して表記する。

2. 平野屋手代徳兵衛

2.1 徳兵衛の造形 一生醤油のごとく一

本作品の主人公平野屋手代の徳兵衛は、「我幼少にてまことの父母に離れ、叔父といひ、親方の苦労となりて人となり」⁸と叔父である親方、すなわち平野屋主人に育ててもらったとの生い立ちであり、実の親は「冥途にまします父母」⁹と既にこの世には居ない。在所の継母の存在は明らかになっているものの、実の親に死に別れた後、大坂の実の叔父のもとにおいて、醤油屋での奉公に邁進していた。

おれが旦那は主ながら、現在の叔父、甥なれば、ねんごろにも預かる。また身どもも奉公にこれほども油断せず。商ひものも、文字ひらなか違へたことのあらばこそ。¹⁰

このように主人と徳兵衛の間柄は「ねんごろにも預かる」と親切に扱われたとあり良好であった上に、徳兵衛自身も緊張感をもって商いの道に精進していたと語られる。「在所の母は継母なるが」¹¹「老母」¹²「またこの母といふ人が、この世があゝの世へ返っても、握った銀を放さばこそ」¹³と、老いた継母は存命するものの、徳兵衛との関係性は信頼を媒介しているものとは言いつらく、後ろ盾になるものではない。平野屋での日々が徳兵衛の生活そのもの、さらには人生そのものと言っても過言ではなかったのである。

徳兵衛は「生玉社の場」で「今は手代と埋れ木の、生醤油の袖したたるき」¹⁴との詞章とともに初めて登場する。今はまだ何物でもない醤油屋の奉公人、であることを示すために用いられたのは「生醤油」の語である。生醤油とは腐敗を防ぐための火入れをしていない状態であり、また水、調味料も未投入の、生の醤油のことである。この生醤油の語に徳兵衛の性質が籠められているとするならば、新鮮な、あるいは何も加えられていない、という意味になるだろう。それは純朴な気質と捉えることもできようが、

そこに徳兵衛の良くも悪くも混じりけなく裏のない、正直で生一本な性質が表現されているのではないだろうか。

ここで平野屋の商いの様子を整理する。生玉社の場の徳兵衛は、重量物の醤油樽を奴、つまり下僕あるいは丁稚の長蔵に担がせている。近松世話物で油商が登場する『女殺油地獄』では、主人公河内屋与兵衛も主人であるその継父も、自ら重量物である油桶を天秤棒で担いで商いを行っている。人を雇う余裕がないとの描写もある。この状況との比較によってまず平野屋は、ある程度以上の身代・組織であることが解る。

取引の様子はどうか。「寺町の久本寺様・長久寺様・上町から屋敷方回って（中略）安土町の紺屋へ寄って、銭取りやや」¹⁵と得意先も多岐に亘ることが解る上に、下僕に銭、つまり現金を扱わせているという描写がある。『女殺油地獄』ではまた、節季期日の夜間に、商家の主人自らが遠方まで掛け取りに足を運んでいる。このことと比べると、手代も現金を手にし、下僕にも一部銭を触らせるような状況については余裕が垣間見られる。特別な念押しはなく慣れたやり取りにも見え、これは定常的に平野屋が、繁盛の状態であったことに伴う日常の姿と思われる。それはまた繁忙であろうし、奉公人らも建設的な意味において、慌ただしく繁多であると推察できる。

少し後の記録とはなるが業界の記録を見てみよう。

江戸時代の中期の享保改革期の調査によると、一七二六（享保十一）年の醤油の江戸への入荷量は一三万二八二九樽を数えており、そのうち大阪からの入荷量は一〇万一千四七五樽となっていた。この時期の江戸への醤油の入荷量の七六%余が関西産の下り醤油からなっていたのである。¹⁶

このような当時の実態とも平野屋の描写は整合する。醤油は江戸時代前期頃から中期頃まで、西日本つまり近畿各地においての生産が主流であった。日本近代史が専門の脇田修氏は『曾根崎心中』の徳兵衛は本町の醤油屋の手代であるが、この平野屋は江戸・京にも出店を持っていた¹⁷と当時実際に存在し

た平野屋の記録を紐解いている。江戸への回漕もその守備範囲としていた醤油業界の豊かさが、徳兵衛と下僕のわずかなやり取りからも推察できるのである。

多くの奉公人を抱え、安定している大きな商いとは、すなわち組織が形成され、そこにはこれをどのように経営管理するかという課題が浮上してくる。物語では平野屋主人は「内儀の姪に二貫目付けて、女夫にし、商ひさせうという談合。」¹⁸と、徳兵衛を見込んで暖簾分けを勧めようとしている。主人夫婦双方の身内とさらに婚姻関係を結ぶことは、財産管理の側面からも有利であり、体制強化にもさらに寄与することとなる。経営管理や事業の継続への取り組みは、利害関係者全てに対して社会的責任を伴うものでもある。平野屋主人の責務として当然の如くそれは計画され、実行へと移されようとするのであった。

在所の母は継母なるが、我に隠して、親方と談合極め、二貫目の銀を握って変えられしを、このうっそりが夢にも知らず、後の月からもやくり出し、押して祝言させうとある¹⁹

この描写は徳兵衛の視点から見た、否定的な表現であるが、家父長制を基にした当時の社会基盤を鑑み、また平野屋側の社会的責務も踏まえて示されたこの方向性は、実は非常に正しい判断を伴っている。継母に理が通され、しかもその補償となる二貫目も素早く支払われており、言うなれば適切で賢明な処理が行われている。

しかしながらこの名誉の拔擢といえよう話は、徳兵衛には、個人の尊厳に対峙する、義理を表象するものとして受け止められたのである。この事態を、「今まで様に様を付け、崇まへた娘御に、銀を付けて申し受け、一生女房の機嫌取り」²⁰と徳兵衛は感受した。生醤油のように純朴な徳兵衛の性質は、暖簾分けによる安定した商家の主への拔擢という、幸運ともいえよう縁談を忌避したのであった。

そしておはつという存在は、それだけの身代を投げうってでも替え難い、徳兵衛にとっては深い思いを寄せる、恋人であった。「そなたという人持ちて、

なんの心が移ろうぞ」²¹と徳兵衛は、その純朴で生一本な心でおはつとの道を決して行くのであった。

2.2 長年にわたる修行 一春を重ねて一

徳兵衛はこの時「二十五歳の厄の年」²²とある。また「焦がるゝ胸のひら野屋に、春を重ねし雛男」²³と表現されているがこれはテキスト頭注に拠ると「年季を重ねたやさ男。年季奉公の契約期間は三月が主」²⁴とあり、商家において奉公人としての修行を重ねる年月を送ってきた、とする詞章である。世取という事業承継者としての立場ではなく、あくまで春、つまり年季という奉公人側の立場で歳月を重ねてきていたことになる。やさ（優：八上注）男とはまた「風雅のたしなみのある、心のやさしい男」²⁵との意味であり、長年にわたっての商家奉公の中で、相応に苦労も重ねただろうが、商売に携わる者としての如才なさなどを備えてきたこととなる。しかし徳兵衛が持っていた心の優しさはまた、九平次に付け込まれ、まんまと陥れられてしまう弱点も内包するのであった。

金策の描写も、徳兵衛の商人としての成長を裏付ける。「京の五条の醤油問屋、つねづね銀の取り遣りすれば、これを頼みに上がってみても、折しも悪う銀もなし。」²⁶とある。折悪く銀は貸せないという首尾に終わったものの、手代として先方とまとまった金額の商談が出来るということになる。徳兵衛が金策に走る金額は「内儀の姪に二貫目付けて」²⁷とある通りの二貫目という金額である。テキストの解説の中で近世演劇研究者の鳥越文蔵氏は、換算の基準は複数あるとした上でこの金額は「三二〇万円位の金額」²⁸と解説している。いずれにしても一介の奉公人がすぐに用意できる金額ではないわけであるから金策に走るものであり、高額な金額を取引先に交渉できる力量を「つねづね」より備えていたということになろう。このことは、徳兵衛の職務において培われてきた、信用の度合いが推察できるといえるのではないだろうか。それは見習いから長年に渡って築き上げられた修練の賜物とも考察できる。

さらに一連のトラブルの発覚をうけての金策から戻った、この日の生玉社の場において徳兵衛は従前のように通常業務に復帰している。この時は主人に

反旗を翻した直後であり、そして期限の四月七日までに二貫目を返済したあとは、大坂から出ていけと言われている状況下であった。このことを考え合わせ、徳兵衛の業務の習熟度に対する信用は、経営者側からみて安定的に評価できたとするならば、この年月の徳兵衛の努力は並大抵のものではなかったに違いない。徳兵衛は一筋に商家奉公の道を邁進してきたのである。

染谷氏は、手代という商家奉公人の修行の重要な要素の中に、社交場、つまり遊所通いも含まれていたと指摘する。

即ち徳兵衛は自立して生活を設計したかったのである。それは彼が他の所で「男の我」「男をみがく」など盛んに「男」を強調していることから窺われる。そして更に注意されるのは、彼が場末とはいえ遊廓に頻繁に出入りしていたことである。（中略）遊廓は当時の商家にとって社交場であり、かつ重要な情報源であったからである²⁹

このように当時の商家の手代の目指すべき指針として、商人としての基礎知識を会得すると同時に、社会とのあらゆる連携の必要性から、遊所を含んだ世間との交際もまた、必要であったと分析している。篤実に手代修行の日々を重ねる中で、社交場なる遊所に足を運んだ徳兵衛は知識や知見、また人脈を伸ばした。その先に九平次との交誼があり、同様におはつとも出会うこととなったのである。

徳兵衛は「春を重ね」た長年の修行に励み、主人の抜擢に相応しい実力を備えるまでの成長を遂げた。「この正直を見てとって。」³⁰と平野屋主人夫妻は徳兵衛を高く評価し、暖簾分けさせようと判断したのであった。しかもその生業は一大市場を背景に持つ生活必需品の醤油業であり、安定した商材を擁し、徳兵衛の将来は約束されたのも同然、本来ならば前途洋々たるものであったと言えただろう。

しかしおはつという恋しい存在を持ち、また研鑽の日々を過ごしつつ純熟してきた徳兵衛であったが、言われる通りの妻をあてがわれ、引き続き隷属するかのような日々を過ごすことは、その矜持が許さな

かったのである。生一本の純朴さが、それを受け付けなかったとも言えるのではないだろうか。男、つまり面目が立つかどうか、ということへの意識もまた重要であった。成長を遂げて身に着けてきた力量を見込まれたその抜擢は、しかし徳兵衛の苦しみを引き出す皮肉な要因となっていく。

3. 冤罪との戦い

3.1 油屋九平次 一時貸しに貸したるが—

徳兵衛は、意に添わぬ縁談とこれにまつわる二貫目の銀の顛末については、継母から奪還でき、自力での事態の收拾の見通しを立てることが出来た。しかし純朴な徳兵衛はここで大きな失敗を犯す。問題の二貫目の銀をすぐに叔父に返済せず、油屋九平次に泣きつかれ、時貸し、つまり一時的に用立ててしまったのである。染谷氏はこれが、九平次が周到に準備した罠であることを分析している。

九平次の行動は唐突ではない。まず注意しなくてはならないのは、徳兵衛がお初に九平次へ貸した金の説明をした折、「あいつも男をみがく奴、それが難儀も知っている」と言っている点である。九平次は徳兵衛の置かれた状況を詳しく知っていたのである。³¹

このように友として徳兵衛の事情を聞かされていた九平次は、徳兵衛を嵌めるために周到な計画を立てた。あらかじめ印判を無くしたと届けを出した上で「後の月の晦日たった一日要ることあり」³²と徳兵衛に泣きつき、二貫目を手にすることに成功する。この際無くしたはずの印判を使用して、証文を作成させておいた。次に返済期限の前日までに姿を現さないことで、確実に四月六日に自分を探しに来るだろう徳兵衛を予測し「先手を打ち、公的な人間の面前で徳兵衛の騙りを印象付けようと企んだとみて間違いない」³³と「町の衆」を連れた上で、彼らにこの印判にまつわる徳兵衛の犯罪を、巧みに認識させた。もちろんこれは無実の罪、つまり冤罪であるが、全ては徳兵衛の騙りであり、自分は二貫目の銀など借りていた事実はない、と九平次は徳兵衛を陥れることに成功したのである。染谷氏はこの状況には当時

の社会状況があるとする。

十七世紀後半に入って爆発的な経済成長を遂げた商人社会が、十七世紀末の元禄期になるとその成長に翳りが生じ、その自己防衛策として商家は資本を分散するのではなく、一本化もしくは限定するイエの制度を採用したということである。³⁴

このように経済成長が止まってしまった時世においては、商家の奉公人は自主的な独立が難しくなり、主人に見込まれるような幸運が訪れなければ、「犯罪に手を染める道」³⁵も辞さないというのが当時の倫理観であったことを「手代層の反乱」とでも呼びたくなるような、使用人たちをめぐる極めて深刻な事件が急増していた」³⁶ことを指摘した上で分析している。染谷氏はさらに以下のようにも述べている。

「しやらな丁稚あがりめ」と罵倒していることも見逃せない。すなわち、徳兵衛は丁稚から手代になったばかりなのに、「(丁稚あがり」とは丁稚から手代になったばかりの意)暖簾分けの幸運をつかんでいたことになる。先輩格の九平次からすれば大いに嫉妬心を刺激されたであろう。³⁷

「丁稚あがり」とはまた幼少のころから真面目に修練を積んできた、ということでもあるだろう。しかし研鑽の結果は、主人に商売を分けてもらえるような境遇にも至ったことにより、図らずも九平次の羨望と嫉妬の対象となってしまったのである。徳兵衛は「あいつも男をみがく奴」とも口にしていて、あいつも、とは九平次もそして徳兵衛も、男としての名誉を重んじているということである。そしてこれを磨く、つまり修練してきたのであった。

そのように切磋琢磨してきた間柄でもあった徳兵衛だからゆえ、その出世と幸運を妬んだ九平次は、完膚なきまでに徹底的に徳兵衛を叩きのめすために、念入りに計画を練った。二貫目を奪うだけではなく、印判を盗み犯罪を犯すこととなるよう、緻密なプランを立て、冤罪に陥れたのであった。「謀判より大罪

人」³⁸つまり「私印偽造または盗用」³⁹との重科を負うこととなった徳兵衛を、社会的に完全に抹殺することに成功したのであった。九平次の計画は完璧であった。徳兵衛の名誉や体面は崩れ去り、そこには恥と屈辱が残るのみであった。そして徳兵衛がこの汚名をそそぐには、もはや死に拠る抗議しか残されてはいなかったのである。

染谷氏はまた、作品内における情報伝達の速さを指摘している。おはつが徳兵衛の行方を捜すために確認したのは「座頭の大市が友達衆に聞けば」⁴⁰とある。座頭とは遊所における太鼓持ちであるが、その情報網とシステムが理解できる。そしてわずかな時間経過の中でおはつの朋輩は、徳兵衛が生玉社で「たんと打たれさんしたと聞いたが」⁴¹と話題にしている。「騙りを言うて縛られての、偽判して括られての。」⁴²と、九平次の仕組んだ通りの筋書きによる偽りの噂が流布される。そこには「日々、情報を追い求め、周囲の風聞に敏感であった商家の主人や手代たち」⁴³の存在があったことを染谷氏は指摘する。

「この徳兵衛が正直の心の底の涼しさは、三日を過ぎず、大坂中へ申し訳」⁴⁴と、徳兵衛は当初、汚名を晴らすために心中するにも、三日程度は猶予があると踏んでいた。しかしその情報速度の素早さは驚くほどであり、「そのうち四方八方の守備はぐわらりと違ってくる。もはや今宵は過ぎされず」⁴⁵と、今宵、つまりその日のうちに死なねば汚名をそそぐことは叶わない、との局面を迎えていく。その背景には九平次が「悪口仲間二、三人」⁴⁶と天満屋に乗り込み、悪評を触れ回るなど、情報速度を付勢せんとする念入りな手はずもあった。九平次の妬みは激しく、その謀略は狡猾であった。

徳兵衛は元々宛がい扶持のような縁談とそれに伴う昇進を嫌い、自らの価値観を信じ、主人と対立、すでに長年の基盤であった平野屋に戻ることも、同時に実の叔父である主人を頼ることもできなくなっている。さらに用意周到なこの冤罪により、「男も立たず、身も立たず」⁴⁷と、進退窮まってしまう。

しかしおはつはその徳兵衛に「大坂を堰かれさんしても、盗み街の身ではなし。どうしてなりとも置く分は、わしが心にあることなり」⁴⁸と、序盤から迷いなく、寄り添うと述べている。さらに詞章は以下の

ように続く。

逢ふに逢はれぬその時は、この世ばかりの約束か。さうした例のないではなし。死ぬるを高の死出の山、三途の川は堰く人も。堰かるる人もあるまいと⁴⁹

このように、二人一緒に居るための、おはつの悲壮なまでの決意は一貫している。

おはつは「一所に死ぬる」⁵⁰と幾度も繰り返す。二人で逝くことを選択し、「一所に死ぬる」その為の場所として天神社が鎮座する「曾根崎の森」に向かうのであった。そこは祭神として菅原道真公が祀られている場所であった。

3.2 菅原道真公縁起

一明けなばうしや天神の森で死なんと手を引きて一

詞章の中の菅公の記憶は「明けなばうしや天神の森で死なんと手を引きて」⁵¹と示される。天神の使いである「牛」を修辞に入れながら、最期場の露天神社を、二人がその目的地として認識する場面となっている。テキストである翻刻本、ならびにその原版にあたる浄瑠璃正本（じょうるりしょうほん）においては「うし」と仮名表記することで、牛は憂しとの掛詞となる。夜が明けると人の噂が廻り「ぐわらりと違ってくる」ことは憂いとなる。つまり機を逸すと噂はさらに拡散され、汚名を晴らすことも更に難しくなる、という意味に向けても、うしの語は巧みに機能する。自立した男としての矜持を重視している徳兵衛の倫理観では、これは耐え難い屈辱となる。そして夜が明ける前に心中死を確実に果たさなければ取返しはつかなくなるとの意識が、物語に通底していく。

「死んで恥をすゝがいでは」⁵²と決意の上、死出の道行を歩む二人は「命を追はゆる鶏の声」⁵³に急かされながら蜷川に沿って東行する。時間に追われながらも「天神の森で死なんと手を引きて」⁵⁴と目的地を定め、手を携えて目指していく。

この「森」は、このあと二回詞章に現れるが、その際はいずれも「曾根崎の森」となっており、「天神の

森」と表現されるのはこの箇所のみである。明確に天神すなわち菅公の存在を意識しつつ、最終目標地を定めていく場面となる。

最期場となった当地・曾根崎村の露天神社の由来を確認する。

菅原道真が大宰府に向かう途中北野の太融寺に参詣し、曾根崎周辺の路上の露の深かったことから「露と散る涙に袖は朽ちにけり都のことを思ひ出づれば」と詠じたと伝える。やがて道真を配祀して「露天神社」と称するに至った⁵⁵

左遷された際、この地を菅公が通り、都を想って涙で袖を濡らしたと歌を詠んだとの伝承が残り、露天神社の社名自体が菅公の和歌由来だということになる。その菅公の縁起を追うこととする。

菅公最大の特徴として怨霊の伝説が挙げられるだろう。その経緯を確認する。菅公は現在の大学教授にあたる学問の最高峰、文章博士（もんじょうはかせ）として、また「菅家廊下」（かんけろうか）という私塾からさまざまな優秀な人材を輩出するなど、元来は政治家というより文官として勤仕していた。その目覚ましい成果をもって宇多天皇に重用され、政治を担うようになり、右大臣の地位まで上り詰めるも、政敵に讒訴され遠く大宰府に左遷されるのである。それは一族郎党まで都を追われる苛烈な仕儀であった。大宰府ではまた政務に当たることも禁じられ、それは衣食住もままならなくなるということであり、死罪を命じられたに等しい、あるいはそれ以上の仕打ちを受けたことになった。それはまた「その晩年が悲惨であっただけに死後の怨霊（おんりょう）に対する怖（おそ）れは強く」⁵⁶と、怨霊の伝説と重なりあって遺恨と怨嗟の深さを、京都をはじめとして各地に伝えていくことになるのであった。

日本史が専門の檜垣巧氏は菅公の怨霊伝説の背景についての分析に伴い、以下のように述べている。

当時の貴族らの間では、破格の昇進のことを「越階」といい、それは人々の羨望の的となっていたというより、しばしば強い嫉妬と敵意の対象となった。菅原道真の場合もそのことがあては

まる。⁵⁷

上位者に篤実に勤仕し、また使命を忠実に果たし、それが認められ重用されるも、妬みにより冤罪に陥れられる状況は、前述したように幸運な出世話に恵まれたことにより、九平次から嫉妬と敵意を抱かれていた徳兵衛と共通点として合致するものである。そして菅公、徳兵衛とも、その先には艱難辛苦さらには破滅が待ち受けるのみであった。菅公の伝承と徳兵衛の災厄とは、双方の特徴の整合が確認できる。

このことから、本作品は菅公縁起の設定を借りて近松が創作した、と推察できるのではないだろうか。歌人でもある菅公に準えるならば、それは本歌取りにも喩えられるとも言えるだろう。徳兵衛の境遇には菅公縁起、そしてその深い悲哀が、重層的に投影されていると言えるのである。

そのことを裏付ける一つのキーワードとしてまた、「手本」の語の配置があるのではないだろうか。本作品内では手本の語は二回使用されている。いずれも最終章「曾根崎天神の森の場」であり、そこはつまり菅公が祀られるとともに、おはつ徳兵衛二人が選んだ最期の地でもある。この地に到着して二人は身体を結び付け、刃物による凄惨な死を遂げていく。

手本の語の配置を確認する。一つ目は森の中において二人はまだ生きており、「サアこゝに極めんと。」⁵⁸と場所を決め「はつが袖より剃刀出し。」⁵⁹ながら語る場面である。

一所に死ぬるこの嬉しさと言ひければ、オゝ神妙、頼もしゝ、さほどに心落ち着くからは、最期も案ずることはなし。さりながら今はの時の苦患にて、死に姿見苦しと言はれんも口惜しゝ。この二本の連理の木に身体をきつと結びつけ、いさぎよう死ぬまいか。世に類なき死にやうの。手本とならん。⁶⁰

このように手本の語はおはつの口から発せられる。それは決死の二人に、最後の力を与える語となって、その誇りある精神性を支える鍵となる。

今一つは、物語全体の主題を決する、極めて重要な役割を持つ。

誰が告ぐるとは、曾根崎の森の下風音に聞え、とり伝へ、貴賤群集の回向の種、未来成仏疑ひなき、恋の手本となりにけり。⁶¹

若い二人のその死は、「音に聞え」と評判となった。それは「恋の手本」と称賛されるほどとなったと結ぶ。そして未来世での成仏が祈念される中、手本の語は物語の次元を高みへ導くかのごとく、結語として物語を締めくくる。

以上が本作品における手本の配置であるが、手本の語の意味は元来、詳しくは後述するが、学問とは不可分である。そして菅公は文章博士として手本を示す立場にあり、手本は菅公とは切り離せない語であった。つまり、本作品最終章において、誇りを守り抜こうとする二人の本質を主張するために配置された手本の語に、菅公の存在を接続させ、示唆する意図が籠められていると言えるのではないだろうか。

では凄惨な心中死の前後に配置された手本の語にはさらにどのような意図があったのであろうか。次章では死に至る二人に迫ることにする。

4. 二人で死ぬことの意味

4.1 おはつの造形 一色に焦がれて死なうなら

本作品におけるおはつの背景を整理する。おはつは私娼街に生きる女性である。近世文学研究者の廣末保氏は、おはつのような近松世話物主人公の女性らを「彼女らは、島原や新町の上級の遊女のように洗練されていない」⁶²と指摘し、同時に「生きるための売色」⁶³をする惣花すなわち街娼とも異なるとし、「恋と現実が同時に描きだされ」⁶⁴ているとした上で、さらに以下のように分析している。

わたしは、私娼の遊里が現実と接している面を強調したが、(中略) いったん問題が起れば、素人じみた言動に出やすいということ、それが遊女でありながら遊女という限定をこえた庶民性に通じ、観客に親近感を与えたということがあげられる。しかし、たとえば近松がお初を恋知りと評したように、廓を中心として作りだされた恋知り—それは町民のある種の理想でもあ

ったが一を持っていた。その一見相容れないような二つの要素が、きわどい形で共存しているといった女性であった。⁶⁵

このように私娼街の遊女の独特の立場と性質を論じている。恋知りとは「恋愛の情を解すること。遊女との恋のかけひきなどに通じること」⁶⁶である。蜷川すなわち堂島新地は新興の私娼街である。同じ遊女であっても「洗練」と廣末氏が述べる官許の遊廓とは、規模や構造、そして格式などの次元が大きく異なる。そして街娼とも状況や制約は異なる。その中において新興の私娼街、堂島新地・天満屋の抱え遊女であったのがおはつであり、廣末氏曰く「恋と現実が同時に」存在する「素人じみた」性質を内包していた。官許の遊廓ほど仕来りや責任・制約がないという意味で敷居が低かろうが、それはもちろん廓の外における自由という意味あいとは乖離する。愛しい相手と正式に添うことは許されない。あくまで遊所、遊びの場に身を置いたのがおはつなのであった。

しかしながら、そのような中において彼女ら、そしておはつには、ただ恋だけは許されたのだといえるだろう。商売女の駆け引きあるそれではなく、「素人じみた」「私娼」に許される人間性が保持される恋、つまり人間の自然な情感、そして心を核にするものである。しかし落籍されるか、年季を終えて思いを成就できれば別であるが、この心の恋を真実のものにするには、その身が金銭と引き換えである遊所に居る以上、究極の形である死以外には方法はないと言えるだろう。おはつの恋の完遂、それは心中死なのである。

おはつは序盤の観音巡りで高台から火葬場の煙を臨みながら、「色に焦がれて死なうなら、しんぞこの身はなり次第。」⁶⁷つまり、恋に焦がれて死ぬのであればこの身はどうなっても構わないと、潔くそして心の底からの宣言をしている。私娼にたった一つ許された精神性の証明である恋を、成し遂げたいという意志が示されている。身分制度があり、また性労働者として見縊られよう立場の遊女の、誇りと意志を伴ったこの造形は見事としか言いようがないものである。そしておはつは、その恋の相手、徳兵衛を

救済していくことにもなるのである。

物語において、意に添わぬ縁談に端を発し、二貫目の銀を騙し取られた上に冤罪に嵌められる一連の災厄は、全て徳兵衛に降りかかっている。そして徳兵衛は「この銀がなければ、我らも死なねばならぬ。命代りの銀」⁶⁸と語り、もはや畢竟死ぬしかない、というところまで追いつめられるのである。さらに徳兵衛の描写は、九平次に嵌められ、そして殴られ、徹底的に陥れられ、辱められている。

髪もほどかれ、帯も解け.あなたこなたへ臥しまろび、やれ九平次め、畜生め、おのれ生けておかうかと（中略）大声上げて涙を流し（中略）口惜しや、無念やな.このごとく踏みたゝかれ、男も立たず、身も立たずエゝ最前につかみつき、食ひついてなりとも死なんものをと、大地をたゝき、齒がみをなし.拳を握り、嘆きしは⁶⁹

このように徳兵衛の悶絶せんばかりのその悔しさは、往来において大声で叫喚するほどに描かれている。後ろ盾を持たず、叔父に叛き、九平次に欺かれ罪にまで問われ、さらにその冤罪を証明できない徳兵衛には、「証拠なければ、理も立たず。」⁷⁰と、もはや成す術がない。「男も立たず、身も立たず」と培ってきた信用、そして自尊の精神の全てを失い、無惨の極致に至る男に世間は冷酷であるだろう。通常はこのあと惨めな最期が待っている。

しかしおはつは遊女でありながら、金の鎖の切れた徳兵衛を見捨てることはなかった。徳兵衛と「一所に」逝くこと、そして「死にやうの、手本」となること、そのことのためならば「しんぞこの身はなり次第」つまり神に誓って自分はどうなっても構わない、ということが自誓するおはつの、その一貫した希みであった。愛しい相手と実社会で添うことも、子を産み育むこともできないが、徳兵衛との恋路だけは、あくまでも全うするのだと、徳兵衛に最後まで寄り添うのであった。

徳兵衛自身もおはつが居ることを「そなたという人もちて」と言及し、有利な縁談を袖に出来るほどの、恋しく信頼する存在として認識している。そのことにより、そして無惨の極致としか言いようのな

かった徳兵衛の身の上、そしてそれに続く死への選択を、二人が一緒に死ぬことを通して、主体的な理念に変換させていくこととなる。「恋の手本」として二人で死ぬことで、つまりおはつは徳兵衛により、そして徳兵衛はおはつにより救済されるのである。

4.2 おはつの覚悟 一死んで恥をすゝがいでは一

「天満屋の場」の足問答は、おはつが「死ぬる覚悟が聞きたい」と縁の下に潜む徳兵衛に、独り言になぞらえて、意志を確認しようと問いかける場である。それを聞いた徳兵衛は声を出せない代わりにおはつの足をその手に取る。「うちうなづき.足首取って、喉笛なで.自害するとぞ知らせける」⁷¹と、足を刃物に見立てて意志を伝える。これを受けおはつはあくまで座敷にいる九平次らとの会話にことよせ、実は縁の下の徳兵衛にその決意を伝える。

オゝ、そのはずそのはず.いつまで生きても同じこと.死んで恥をすゝがいでは（中略）徳様に離れて、片時も生きてゐようか.（中略）どうで徳様、一所に死ぬる、わしも一所に死ぬるぞやいの⁷²

このようにおはつは、恋を貫く信念の中で「一所」に死ぬことを切望する。

死出の道行に剃刀を携行していることもまた、「もしも道にて追手のかゝり、われわれになるとても.浮名捨てじと心がけ、剃刀用意いたせしが」⁷³と述べるように、必ず死ぬるようにとの用意として描かれ、おはつの死に向かう意志の強さを際立たせている。

さらに最期場において、「はやはや、殺して殺してと最後を急げば」⁷⁴と、徳兵衛に先に自分を殺害させることもまた、重要であるだろう。おはつが先に殺されるということは、最初に殺人を犯させることである。男の退路を断つことになる。徳兵衛の「一分はすたった」⁷⁵つまり失った面目の躍如のためには、「死んで恥をすゝ」⁷⁶ぐ方法論を貫く必要があり、仕損じてはそれを全うできない。確実に死ぬことが汚名からの名誉回復には必要であった。おはつが先に殺されるということは、おはつが恋に殉じる意味でも、二人一所の心中死にも、また徳兵衛の一分すな

わち面目をはらすという救済、それら全てにおいて不可欠な要素となる。二人は究竟の方法論で助け合うのである。それが恋の手本であった。

前述の「汝も無常の煙にむせぶ、色に焦がれて死なうなら、しんぞこの身はなり次第」⁷⁷とのおはつの宣言の意はただひとつ、恋で死ねた、と皆にあからさまにできるなら、自分は本望であるとの意である。この宣言はまた、何一つ自分の意思を通すことがままならぬ世の中で、恋こそ自分の意思を貫くことができるとするものであり、その意思の深さが物語の機軸をなしている。菅公縁起の地でその意思を遂げることは、おはつの思いの深さを示す絶好の場であり、つまりは「恋の手本」との言葉が導かれるのである。そして手本を示すことは、菅公の職分の一つである。次項においてはこの手本、の意味をさらに深く追求すると同時に、最期場となった「天神の森」との結節点を考察する。

4.3 「天神の森」と最期場の結節点

一恋の手本となりけり―

二人が発見された場所、それは曾根崎天神の森であった。森は樹叢であると同時に、「神聖視され（中略）神社の神域も「もり」とよばれ」⁷⁸との意味を持つ。本作品での「天神の森」も文字通り神域そのものを指す。

天神の森には文官として国家に仕えた、菅公が祀られている。菅公は代々の祖業としても、学問の伝授、後進の育成に寄与した家柄であるが、その職分には人々を学問により導くことがあげられる。そして後進育成や教育、そして教化に必要なのは、示すべき道筋であり指標であるだろう。

これを敷衍そして普及するにあたり、その具体化に重要な使命を帯びるのが手本である。手本の語には、臨本の意、すなわち「文字や絵画などを習うときに、そばに置いて模範とするために書かれた本」⁷⁹の意と、そこから発展して見習うべき「物事を行なうのに、模範とすべき人や物、または行ない。見ならうべきこと。」⁸⁰の意味を持つ。手本にはまた、ただ形だけを真似るというだけではなく、精神性を汲み取っていく指針としての役割が含まれるのである。

本作品において徳兵衛を、そして二人をここまで

突き動かした原動力には、本作品中幾度も表される「男」の概念が深く関わる。男を磨く、つまり責任をもって行動し、その任務を遂行するために修練を重ねること、それが徳兵衛の営為の中での行動規範の根幹を成していた。それはさらに商家に生きる上での信用に繋がる紐帯となった。これを断ち切られ、そして喪失することは、「いづれの手前も面目なし、恥づかし。」⁸¹とあるように、その評価は失墜、恥辱となり、さらに屈辱となる。

大切なことは、本作品においてはおはつもこの基準や倫理観を理解していることである。「蜷川新地天満屋の場」において、徳兵衛の苦境を耳にした段階から、「頼もしだてが身のひしで」⁸²と原因を正確に把握している。徳兵衛の自負が俠気を醸成し、さらにその俠気が災厄をもたらしている。その状況を現実的に把握した上で、その名誉の回復を目指そうとする理念について、「世に類なき死にやうの手本とならん」⁸³とおはつの口を通してはっきりと言挙げされる。徳兵衛は「いかにもと」⁸⁴とこれを肯定し、二人でその誇りを守ろうとするのであった。

本作品のモデルとなった心中死事件については、事件の翌年浮世草子『心中大鑑』の中的一篇として刊行されている。それは本作品と内容を一部異にし、実説に近いと言われている。この内容に拠ると、おはつにも身請け話があり、おはつ徳兵衛双方の事情が重なり心中に至っており、九平次による冤罪は存在しない。よって本作品の冤罪事件は近松による創作であることが判るが、これまでに述べた通り、それは菅公縁起の翻案が施されたと分析できよう。

本作品では無実の罪を着せられたとすることで、長年培ってきた信用やそれに伴う尊厳を失い、汚辱を蒙った徳兵衛の強烈な無念さが浮かび上がってくることとなる。そしてこの苦境に向かい、その尊厳を守り抜こうとした二人が導き出したのは「天神の森で死なん」⁸⁵との針路であった。そして菅公が祀られる森としてのこの神域の役割は、人々を導くことに外ならない。

二人は「死んで恥をすゝぐ」ため、そして尊厳を守るためにここで心中死を全うする。しかし信念はあれど、その評価は不確定要素をはらむ。この天神の森での行動は、自分たちの道筋が正しいかどうか

天神の指針を借り、確認するような意識が左右したのではないだろうか。そして詞章は「恋の手本」と記すことで、二人を肯定するのである。信じる道を歩んだことが恋の手本、として評価されていく。

模範となり、人を導く手本にはまた、行動を促す動因、働きかけの意味が含まれるだろう。そして手本がもつ、精神性を伝えていくという性質、それこそが、菅公の職分との結節点があるといえるだろう。

そして「恋の手本」は命を賭けた二人の思いを通して人間の自尊性を見つめる語として物語において機能し、冒頭に述べた通り本作品は大当たりをとったのである。

5. おわりに

以上に論じてきたように本作品は、曾根崎天神の森で実際に起った心中死事件を浄瑠璃化するにあたり、その地に祀られている菅原道真公の縁起を翻案する手法をとることで、菅公縁起の冤罪からその後の艱難辛苦に至る設定を用い、徳兵衛の境遇に菅公の悲哀の投影を目指し、主人公の背景を重層的に構

築しようとしたと考察する。

さらに「天神の森」、つまり菅公ゆかりの神域という場所設定は、ただの心中の地にとどまらず、「恋の手本」という二人への評価を通して、人々を導く意味を持った。

実際の心中事件を下敷きにしながらも、冤罪、嫉妬、社会的名誉、それに伴う恥辱といった命題が導かれ、登場人物たちの苦悩そして、生と死、名誉と屈辱、愛と救済について深く問いかけている。おはつと徳兵衛が示した「恋の手本」は、世俗の名利を超えて人間の根源にある自尊性を浮かび上がらせる。

今なお、本作品が多様な視点から読み継がれているのは、時代を超えて普遍的な人間の尊厳、そして愛のかたちを鮮烈に照らし出しているからにはほかならない。江戸時代、社会の制約と現実を背景としながらも、恋に生きた二人の姿は、今日の私たちにも「手本」として多くを教え、問い続けているのである。

注

¹ 市島謙吉編『新群書類従第六』（国書刊行会、1907年8月、518頁）

² 注1同書 512頁

³ 早川久美子『『曾根崎心中 57』成立の意義：世話狂言との比較をめぐって』

（『日本文学』、日本文学協会、2007年12月、35-44頁）

⁴ 染谷智幸「情報戦としての心中：『曾根崎心中』の評判・沙汰・噂（〈特集〉文学としての情報/情報としての文学）（『日本文学 56』、日本文学協会、2008年1月、35-43頁）

⁵ 坂梨隆三著「曾根崎心中における語句の異同と「ケ」の字体について」

（『成形大学文学部紀要』（成蹊大学文学部学会、2017年3月）

⁶ 漆澤その子著「江戸における心中物とその時代：『曾根崎心中』を手がかりに」

（『日本研究』、国際日本文化研究センター、2024年10月、49-83頁）

⁷ 鳥越文三・山根為雄ほか校注・訳『新編日本古典文学全集 75 近松門左衛門②』（小学館、1998年5月）43頁

⁸ 注7同書 40-41頁

⁹ 注7同書 41頁

¹⁰ 注7同書 21頁

¹¹ 注7同書 21頁

¹² 注7同書 22頁

¹³ 注7同書 23頁

¹⁴ 注7同書 19頁

¹⁵ 注7同書 19頁

¹⁶ 林玲子・天野雅敏編『日本の味 醤油の歴史』（吉川弘文館、2005年4月、53頁）

¹⁷ 脇田修著『近世大坂の経済と文化』（人文書院、1994年3月、71頁）

¹⁸ 注7同書 21頁

¹⁹ 注7同書 21 - 22頁

²⁰ 注7同書 22頁

²¹ 注7同書 21頁

²² 注7同書 38頁

²³ 注7同書 19頁

²⁴ 注7同書 21頁

²⁵ 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典 第二版 第十三巻』（小学館、2002年1月、91頁）

²⁶ 注7同書 23頁

²⁷ 注7同書 21頁

²⁸ 鳥越文三・山根為雄ほか校注・訳『新編日本古典文学全集 74 近松門左衛門①』（小学館、1998年5月）

2012年3月, 6頁

²⁹ 注4同論文 40頁

³⁰ 注7同書 21頁

³¹ 注4同論文 38頁

³² 注7同書 24頁

³³ 注4同論文 38頁

³⁴ 注4同論文 41頁

³⁵ 注4同論文 41頁

³⁶ 注4同論文 38頁

³⁷ 注4同論文 42頁

³⁸ 注7同書 26頁

³⁹ 注7同書 26頁頭注

⁴⁰ 注7同書 20頁

⁴¹ 注7同書 30頁

⁴² 注7同書 30頁

⁴³ 注4同論文 42頁

⁴⁴ 注7同書 28頁

⁴⁵ 注3同書 31頁

⁴⁶ 注7同書 31頁

⁴⁷ 注7同書 28頁

⁴⁸ 注7同書 24頁

⁴⁹ 注7同書 24頁

⁵⁰ 注7同書 33頁

⁵¹ 注7同書 38頁

⁵² 注7同書 33頁

⁵³ 注7同書 38頁

⁵⁴ 注7同書 38頁

⁵⁵ (有) 平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系 第二八巻 大阪府の地名』
(平凡社, 1986年2月, 570頁)

⁵⁶ 秋葉隆編著『日本大百科全書 12』(小学館, 1995年
7月, 912頁)

⁵⁷ 檜垣巧著「道真の怨霊の考察 ―奈良末・平安初期
の貴族社会の性格とパースハリティーの特質―」(『密
教文化』, 高野山大学出版部, 1993年12月, 42頁)

⁵⁸ 注7同書 39頁

⁵⁹ 注7同書 40頁

⁶⁰ 注7同書 40頁

⁶¹ 注7同書 43頁

⁶² 廣末保著『増補近松序説』(未来社, 1963年9

月, 207頁)

⁶³ 注62同書 211頁

⁶⁴ 注62同書 203頁

⁶⁵ 注62同書 210頁

⁶⁶ 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典
編集部 編『日本国語大辞典 第二版 第五巻』(小
学館, 2001年5月, 163頁)

⁶⁷ 注7同書 16頁

⁶⁸ 注7同書 28頁

⁶⁹ 注7同書 28頁

⁷⁰ 注7同書 32 - 33頁

⁷¹ 注7同書 33頁

⁷² 注7同書 33-34頁

⁷³ 注7同書 40頁

⁷⁴ 注7同書 42頁

⁷⁵ 注7同書 31頁

⁷⁶ 注7同書 33頁

⁷⁷ 注7同書 18頁

⁷⁸ 秋葉隆編著『日本大百科全書 23』(小学館, 1995年
7月, 31頁)

⁷⁹ 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典
編集部 編『日本国語大辞典 第二版 第九巻』(小
学館, 2002年3月, 710頁) なお、本作同時期の用例と
して以下が挙げられている。

* 浮世草子・世間胸算用〔1692〕二・三「内かたへ
きこゆる程手本よみて手ならひするは、其身の徳な
り」

⁸⁰ 注79同書 710頁 なお、参照した用例は以下で
ある。

* 虎冠本狂言・武悪〔室町末～近世初〕「身共が能
い手本じゃに依て、そなたも随分御奉公を大切に勤
めさしめ」

⁸¹ 注7同書 28頁

⁸² 注7同書 32頁

⁸³ 注7同書 40頁

⁸⁴ 注7同書 40頁

⁸⁵ 注7同書 38頁

(Received: August 20, 2025)

(Issued in internet Edition: September 1, 2025)